

太宰府のラムネ

明治期の地方産業の動向を知ることができる資料の一つに、郡是・町是・村是^{そんぜ}があります。郡や町、村単位の詳細な産業統計と将来目標などを掲げたもので、殖産興業の「羅針盤」として作成されました。筑紫郡では明治35（1902）年11月に『筑紫郡是』が作られ、郡内各町村でも同じ頃に町是・村是が出されます。太宰府地域では『太宰府町是』『水城村是』が作られますが、つぶさに項目を追うと興味深いことが分かります。

『町是』『村是』を繰ると消費部門に「ラムネ」の項目があり、太宰府町では「年1人につき3本」、水城村では「1人1本」と記載されています。当時太宰府町では平均してラムネが1年間に1人あたり3本、水城村では1本が飲まれた、という意味です。単価は太宰府町で2銭、水城村では2銭5厘。消費本数と価格に差があります。

次に『太宰府町是』の生産部門を見ると、「ラムネ1戸7万本」とありました。太宰府町にはラムネ工場が1軒あって、年間7万本を製造した、ということです。太宰府町の人口は当時4256人、水城村は2600人、2町村合わせたラムネ消費数は1万5千本程度です。



は残りの5万5千本の行方は？

さらに『筑紫郡是』を見ると、当時郡内にラムネ工場は1軒のみで、郡内では7万6845本のラムネ消費があったことが判明します。つまり、太宰府町のラムネ工場は郡で唯一のもので、そこで作られたラムネはほぼ郡内で消費されていた、と推測されます。また『郡是』には「ラムネ触売^{ふれうり}」という行商1軒の記載があるので、遠隔地でラムネはこの触売により販売され、地域による価格差はそれで生じた、と考えられます（例えば大野村では1本3銭）。

太宰府ではかつて五条にラムネ屋があったことが知られています。『町是』などによりその規模が少し具体的に見えてきたのではないでしょうか。市ホームページでは、発掘により見つかった太宰府のラムネ瓶を紹介しています（文化財調査情報・ページID3545）。また、『太宰府町是』は公文書館で閲覧することができます。

【バックナンバーはこちら】
ページID7241